

コンセンサス会議の歴史

アメリカ : 医療技術に関する専門家のコンセンサス形成

デンマーク : 1980年代、市民主導のテクノロジーアセスメントに
変容
国会のもとに DBT (Danish Board of Technology)

世界各国で実施

(他にも市民参加型の手法はある。シナリオワークショップ、フォーカスグループなど)

日本

- 1998 : 大阪 「遺伝子治療」(研究者による試行)
- 1999 : 東京 「インターネット技術」(研究者による試行)
- 2000 : 全国 「遺伝子組み換え農作物」(農水省の委託事業)
- 2000 : 関東 「ヒトゲノム研究」(科学技術庁の委託事業)

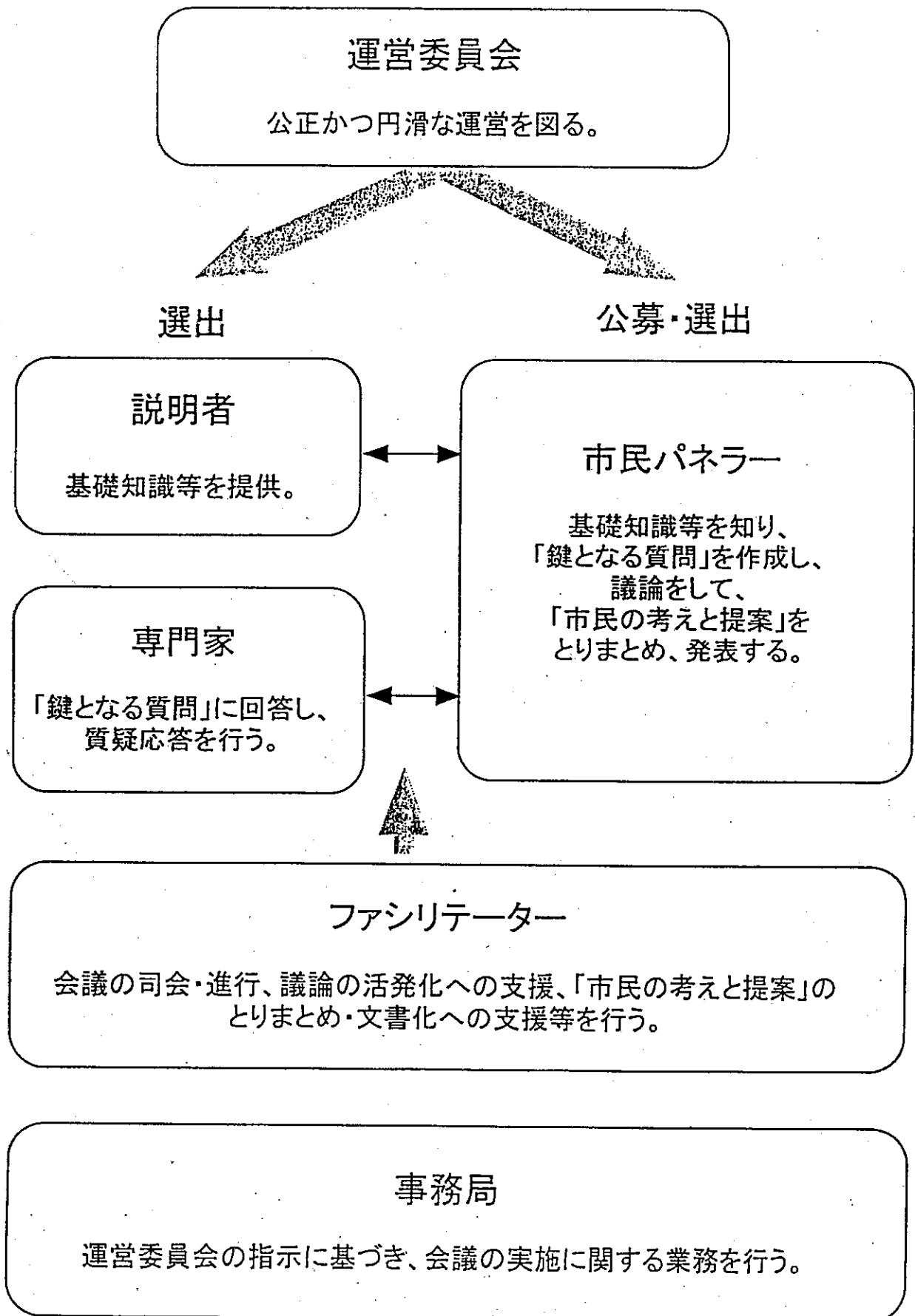
バリエーション

- 2001 : 横浜・仙台 「遺伝子組み換え農作物」(農水省の委託事業)
- 2002 : 全国? 「遺伝子組み換え農作物を考える市民会議ー「情報の共有」と「コミュニケーション」ー」

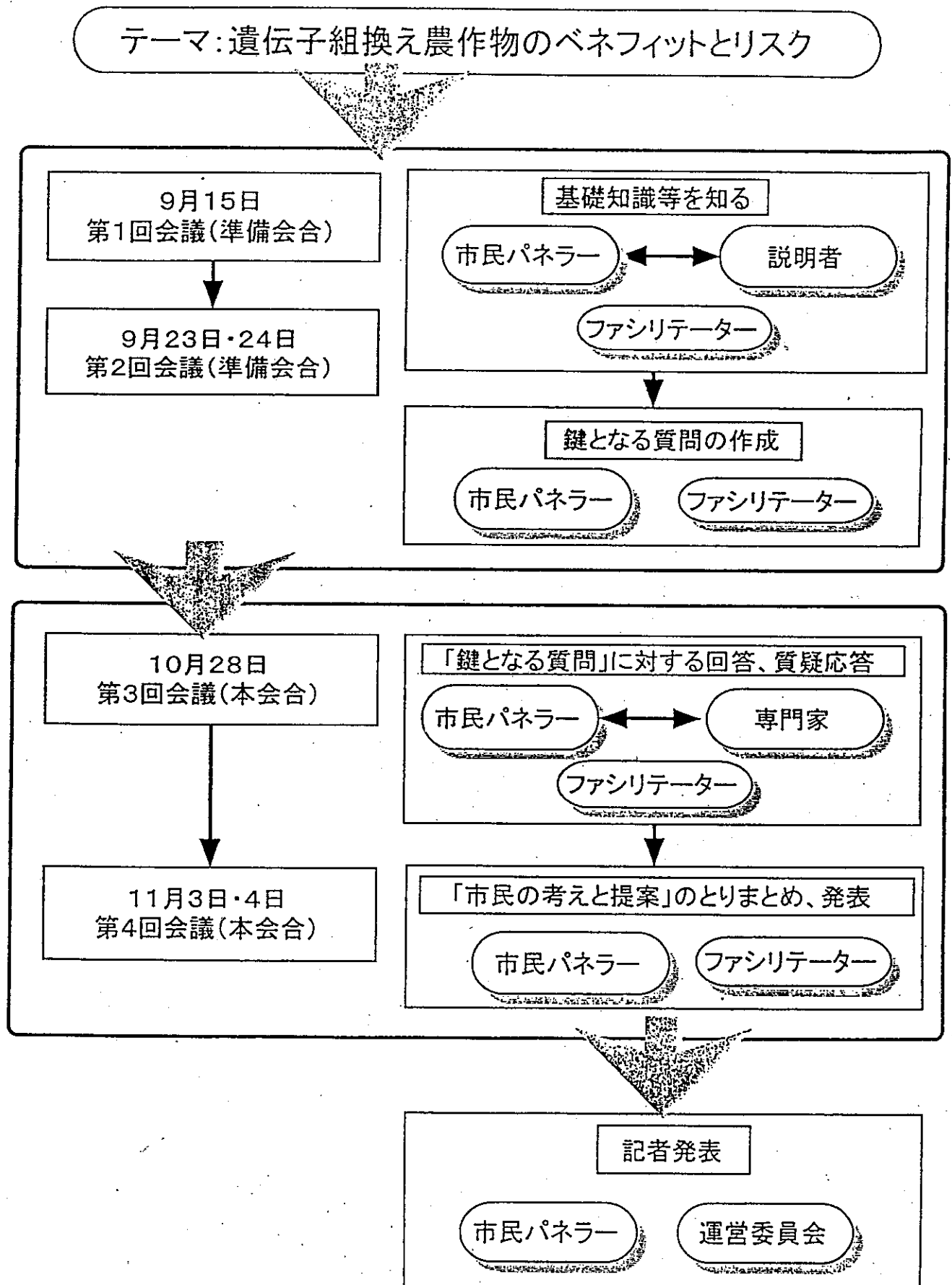
コンセンサス会議

「コンセンサス会議とは、政治的、社会的利害をめぐって論争状態にある科学的もしくは技術的課題に関して、素人からなるグループが専門家に質問し、専門家の答えを聞いた後で、この課題に関する合意を形成し、最終的に彼らの見解を記者会見の場で公表するためのフォーラムである。」(Joss & Durant, 1994,12)

2. 「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」の仕組み



3. 「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」の進め方



コンセンサス会議という手法への懸念

①早く到達されすぎたコンセンサス：

十分な議論が実は尽くされていないのにコンセンサスに到達してしまう可能性。

②見かけだけのコンセンサス：

参加者が発言を控えることによってコンセンサスが生じる可能性。

③不適切な参加者によるコンセンサス：

適切な当事者が加わらずに形成されたコンセンサスが生じる可能性。

④一時的なコンセンサス：

ある時点では妥当なコンセンサスであっても、状況、価値観、知識の変化によってコンセンサスの妥当性が失われる可能性。

平成13年度『科学技術白書』から (国民の科学技術に対する信頼の涵養)

従来、科学技術への無関心の原因は、一般市民の科学技術への理解不足にあるとして、専門家による教育・啓発を図る運動を重視する傾向があったが、科学技術の成果は何を追求すべきか、専門家も気付いていない問題点として何を考慮すべきかなど、市民の側に積極的な観点も含まれていることがある。このため、一般市民に対し、科学技術の「受け手」としての興味関心の喚起だけでなく、専門家との「協同の作り手」として参加意識を喚起することも重要となっている。こうした活動を通じて、国民の科学技術に対する信頼の涵養に努めることが求められている。

先進国の悩み

- ・ **政治過程への国民の参加意欲低下**

- ・ **当局、専門家への信頼の低下**
(特に、科学技術関係)



- ・ **Public Dialogue の必要性**

例) OPEN CHANNELS: public dialogue in science and technology. POST 2001 報告書 (英)

20世紀：三つ折の歩み

○ 1914～

破局の時代

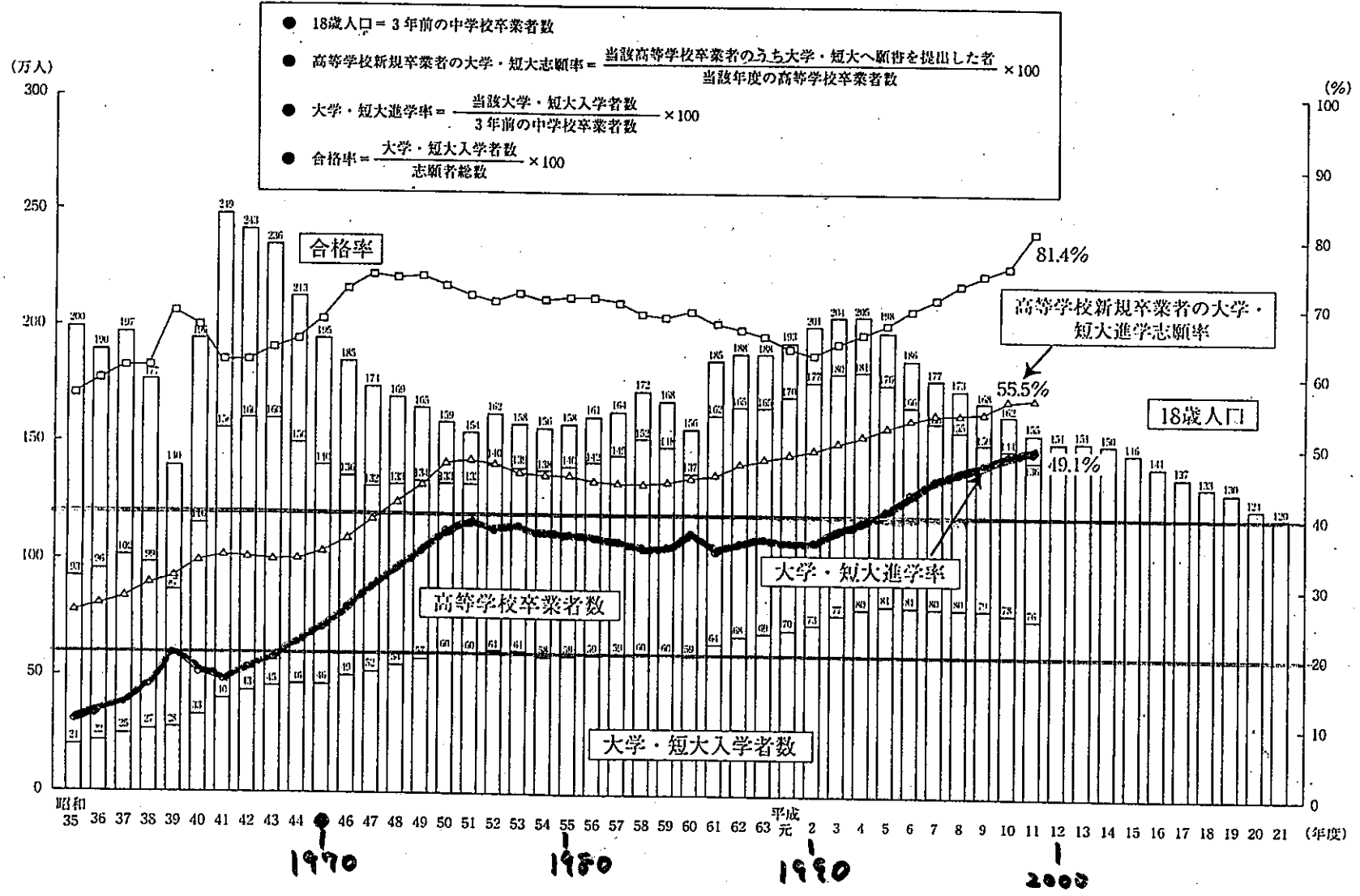
○ 第2次世界大戦終了～

黄金の時代

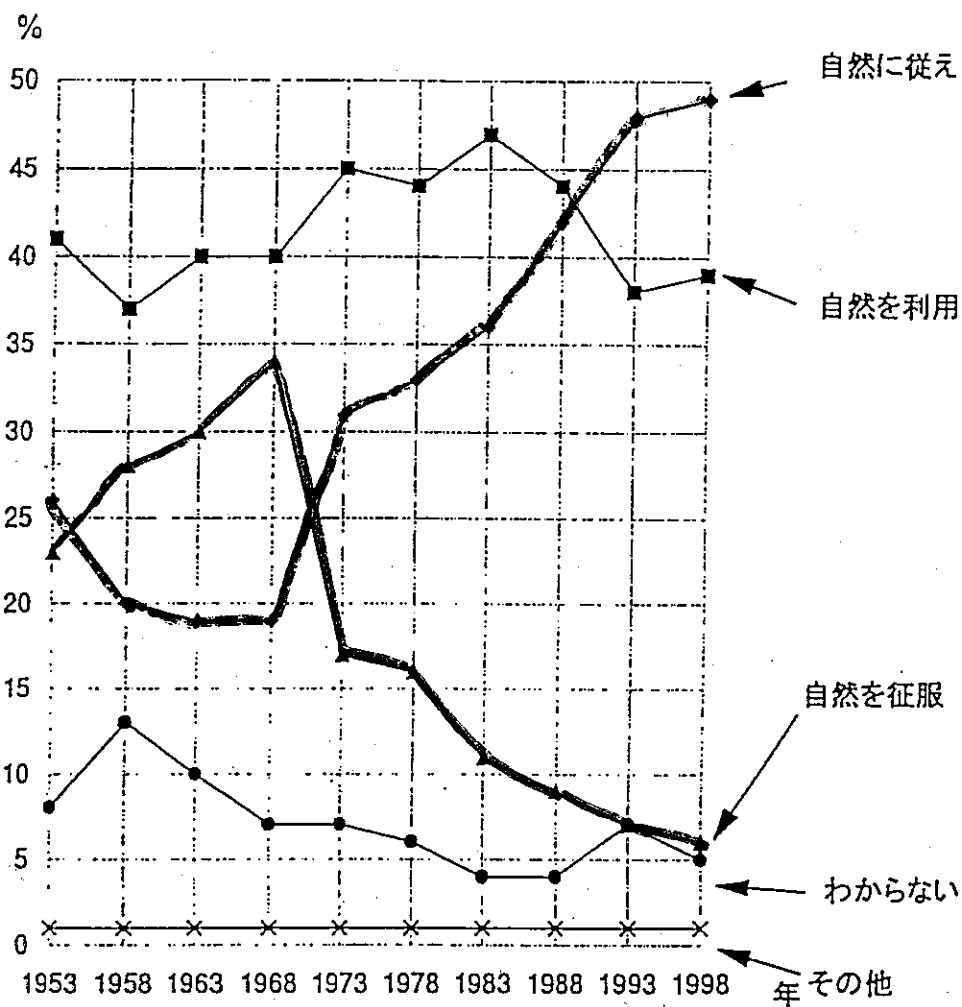
○ 1970年前後～

解体と不確実性と危機の新しい時代

図2-3-1 大学・短期大学の規模等の推移



(3) 自然と人間との関係



「自然と人間との関係について、つぎのような意見があります。あなたがこのうち真実に近いと思うものはどちらか。」

- 人間が幸福になるためには、
- ・自然に従わなければならない。
 - ・自然を利用しなければならない。
 - ・自然を征服してゆかなければならない。
 - ・その他

問題としての1970年代

- ・ トランスサイエンス (Weinberg, 1972)
- ・ Public Citizen (NPO)
- ・ 大学紛争／公害問題
- ・ アポロ11号
- ・ 大阪万国博覧会 (1970)
- ・ オイルショック (1973)
- ・ OTA (Office of Technology Assessment) 1972
- ・ リスクコミュニケーション
- ・ 応用倫理学
- ・ 「黒部の太陽」

1970年代に生じた変化：生産優位の社会から消費社会へ

- 帰属意識の多元化

二枚の名刺／表現する個人

- ものを言う人々の出現

私生活主義 ⇔ 切実さ

- 産業化を支えた価値

手段的価値群（将来中心、効率志向、仕事志向）



- 消費社会の価値

即自的価値群（現在中心、情緒志向、余暇志向）

6、 トランス・サイエンス

Weinberg, Alvin "Science and Trans-Science" *Minerva*, 10, no. 2, 1972

「科学に問うことはできるが、科学によって答えることのできない問題群」

<科学的問い>

「すべての安全装置が故障した場合、カタストロフが起こる」

専門家が合意可能

<トランス・サイエンス的問い>

「すべての安全装置が故障することはあるかどうか」

専門家の合意は失われる

仮に、低確率であることが合意されたとしても、「あり得ない」事象かどうか
という点では合意できない。

Public Discussion の必要性

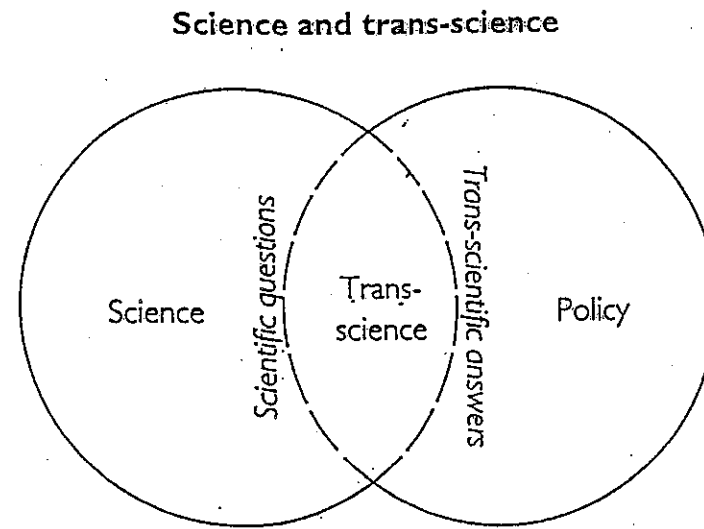
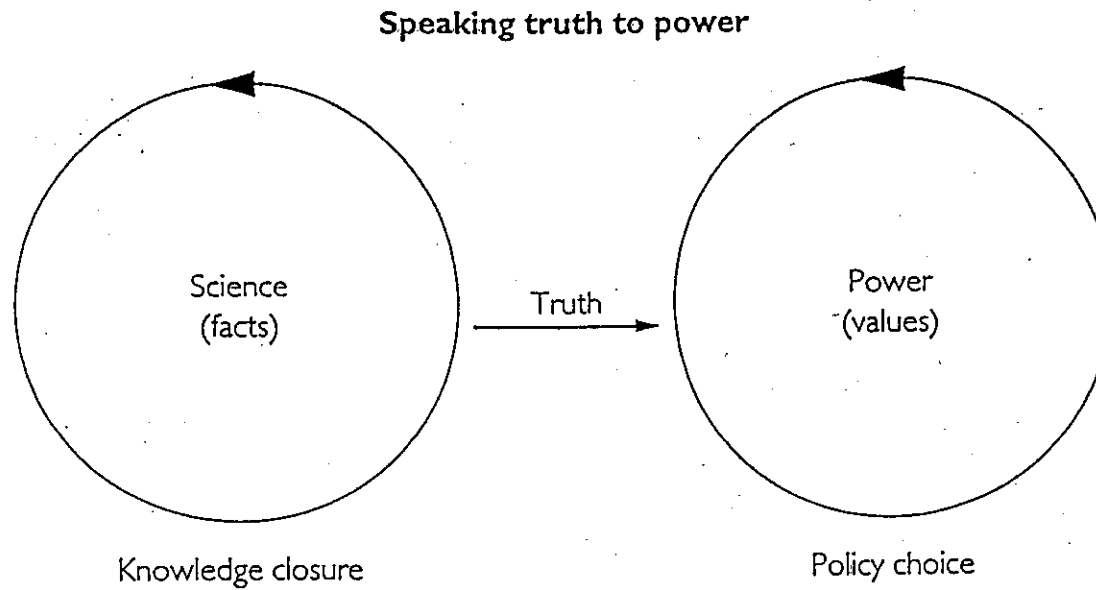


Figure 1.1 Views of the relationship between scientific knowledge and public policy.

「憂慮する人々」の出現

- Voicy group
- Orphan group
- Hurt group

Dialogue を効果的にするために

- ・ **目的の明示**

なぜ Dialogue を行うのか

- ・ **正統性の確保**

プロセスの公正さ、方法、時期の適切さ、参加者の適切さ

- ・ **評価**

プロセスの質の評価

円卓会議の思想

- 1、専門知識の独占排除
- 2、参加者ベースの拡大
- 3、意思決定の創出
- 4、開放性の原則
- 5、自己立法の原則

リスクコミュニケーションの推移

(Fischhoff, 1995 及び Leiss, 1996 による)

(1975-84)

第一段階：数値を把握すればよい

第二段階：数値を市民に知らせればよい

(1985—94)

第三段階：数値の意味を知らせればよい

第四段階：類似のリスクをこれまで受け入れてきた
ことを知らせればよい

第五段階：「得な取引」であることを伝えればよい

第六段階：丁寧に対応すればよい

(1995—)

第七段階：パートナーとして扱わねばならない

原子力について

○信頼の喪失という状況でのコミュニケーション

○解決「マニュアル」は無い

○過去の「円卓会議」の検証を